勇者の鼓動

—自らの運命を刻み出していく勇気ある志と熱き魂を有する者へ—

つくばユナイテッドVOLLEYBALL、CEP松田氏(筑波大学大学院人間総合科学研究科講師)の企画する授業「地域を創る—スポーツデザインプロデュース」では、スポーツ各界で活躍する勇者たちとの対話の中で、スポーツのプロフェッショナルな可能性やスポーツの社会的価値について模索している。

—スポーツは、人、まち、地域に対し、何をデザインプロデュースできるのか？

「無いものは作ってしまえ!!」

第七の勇者

プロフィール
1974年8月27日生まれ。愛媛県松山市出身。筑波大学在学中にインドアの6人制バレーボールをプレー。卒業後にビーチバレーに転向。国内の数多くの大会で優勝、準優勝を経験。2004年アテネオリンピックに出場。2005年引退。現在、日本ビーチバレー文化振興協会常任理事を務める。

元ビーチバレー日本代表
ビーチバレー文化振興協会
常任理事

徳野　涼子

長身ですらりとしたその女性は、元全日本ビーチバレー代表の徳野涼子さん。現在は、ビーチバレー振興協会の常任理事として、その普及に努めている。どうすれば、スポーツ人として社会に貢献ができるかということを考え現在の仕事に取り組む。バレーボールを始めたきっかけ、ビーチバレーへの転身など、これまでの経験や仕事について話した。

そもそもバレーボールを始めたきっかけは、徳野さんが小学生の頃、当時全日本で活躍していた中田久美選手にあこがれてのことだった。バレーボールのクラブもなく、先生に直訴をしてバレーボールクラブを結成した。当時集まった仲間は、どの子も全日本代表になるんだという思いで集まった子供たちだった。卒業アルバムにも「オリンピック選手になる！」と書いていたという。

スポーツが大好き、体育の先生になりたいという思いで筑波大学に進学。バレーボール部に所属した。しかし、大学でたくさんの人たちに会う中で、スポーツに関わるのは体育の先生だけではないということを知った。そんな中、足腰のトレーニングにと、ビーチバレーの大会に出る機会をもらった。その時感じた、夏のビーチの開放感がたまらなく気持ち良かった。ポジションはセッターを務めていた。六人制のバレーボールでは、それぞれの役割分担がはっきりしており、その役割分担の中でチームが協力し得点を重ねる。しかし、ビーチバレーでは違った感覚を得た。たった二人で広いコートの隙間を埋めるために走り回り、また相手のコートの隙間を縫って攻撃を仕掛ける。唯一のパートナーを勝つためにどのように活かしたら良いのかということを常に考えて、攻撃を組み立てる。その感覚が新鮮だったし、身長の低い自分は、六人制バレーでは強化対象の選手にはなれない。しかしビーチバレーは、子供のころに描いた「オリンピック選手になる！」という夢を実現できるフィールドだと確信し、ビーチバレーへの転身をはかった。そして、アテネオリンピック出場。子供の頃に描いた夢を実現できた。

ビーチバレーでは、オリンピック出場の枠は国ごとに設けられているわけではない。世界各国で開催される予選大会で成績を残し、世界ランキングを上げ、オリンピック出場順位に入り込まなければならない。

世界を転戦する中で感じた、日本とのスポーツ環境の違い。日本では、ビーチバレーは海辺だけのスポーツ。内陸部での砂のスポーツといえば、走り幅跳び位。しかし、スイスの山中に作られたビーチバレーのコート。海外では、スポーツの環境を自ら作り出してしまう風土があった。スイスの山中にビーチバレーコートがなければ、砂を運んできて作ってしまえばよいという、環境に対して自由な発想がある。どうすれば環境を整えることができるのかということを考えることで、形無いものを作り上げることを学んだ。

スポーツの強い国。それは、やはりそのスポーツが生活に大変密着していることが言える。例えば、ブラジルのサッカー。子どもたちは広い場所を見つけてはサッカーで遊び、町中にも何かしらサッカーのできる場所が配置されている。

日本でもやっとスポーツ環境を整えることで、それを街づくりに活かそうという動きが出てきた。しかし、まだまだ人々の理解がない部分が多い。ビーチにコートを常設することに対しての理解がなかったり、ビーチを利用する人のために環境を整備しようとする姿勢がなかったりと、働きかけなければならないことがまだまだある。自分は世界各国のビーチを見てきた。世界で見てきたビーチの活用を、ぜひ日本でも展開したいと強く願い、現在の仕事を進めている。

いつか日本全国のビーチがビーチバレーで活性化され、多くの人がビーチバレーを楽しむ環境を作りたい。そして今、徳野さん自身は元オリンピック選手という肩書で紹介される場面が多いが、いつか“海辺のコーディネーター”といった職業を肩書として活躍できる人になりたいと話した。スポーツ選手のセカンドキャリアとして、社会に貢献するためにどのようなことができるのか、そのモデルケースとして後輩アスリートの手本になりたいと最後に力強く語った。

SPORTS SHOP GALLERY・2　molten　asics　REGUARD　MAKO